

雑報

雑誌名	龍南會雑誌
巻	3 5
ページ	6 5 - 7 4
発行年	1895-04-05
その他の言語のタイトル	雑報
URL	http://hdl.handle.net/2298/4558

雜報

就任の辭

生等驚駭の身を以て、乏を雜誌部の委員に承け、敏腕達識の後を繼ぎて、叨に重任を負ふ、誠に狗尾續貂の觀あり。枯陽素より詞藻の著しく、非才固に運用の能を乏、顧みて愧づる所なくんばあらす。然れども、既に任に膺りて筆硯に従事す、奮勵一番、敢て微力を竭さん、加ふるに前途餘す所纔に數月、幸に諸兄の誘掖を辱くし、懋めて而して已まずんば、庶幾くは曠職の譏を免せん。筆を弄し、文を舞はすは、素より生等の能事にあらす、唯所期を完くするを得ば則足る。任は就くは際乏、一言以て諸兄に告ぐ。(編輯委員記)

春色動く

風簾珠を拂へば風亦馨しく、雨窓紗を撲てば雨亦紅あり。梅花既に梢を辞えて、楊柳漸く眉を展ば、嫩寒未だ牖に秀でざれども、雲雀已に蒼空に轉る。淡靄靄として遠山を罩むるは、翠羅を隔て、漏す嬰兒の眠壓の如く、細漣の漲りて坡塘

に、寄するは、彩雲に御えて遊ぶ天女の細語にも似たり。晴嵐に乗じて紙鳶を放つ幼童、香囊を帯びて落花を鋤す老翁、夢を破る流鶯、閨を照らす朧月、視るもの、聞くもの、一として目を娛ばしめ、耳を樂ましめざるはなし。あはれ寔に一刻千金の好時節なり。されど、良辰は得難く、佳候は失ひ易し。二十四番瞬くひまに電過しぬれば、紅魂紫魂、杳として尋ねべからざるものあらむ。此時に際し、善く學び、善く遊ば、庶幾くは青帝の大恵に孤負するところを得む。

前文部大臣井上毅子薨去

前文部大臣井上毅子、宿病を逗子に養はれ乏が、藥石効なく、三月十七日溘焉として遂に薨去せられぬ、痛恨何ぞ己まん。子の職に在る、鞠躬精勵、不續大に擧る、晏天無情、其歳を奪ふ。噫悲夫。謹んで哀悼の意を表す。

演說會概況

本月九日、例によりて演說會を瑞邦館に開く、會するもの無慮四百名、午後一時半開會す。中津三省君「武健論」を演ぶ、君は擊劍部の委員、其演題

の撰擇まことに其人に適せり。先づ堅固の建物に飲々べからざるを説き、武健の國家に切要なる所以を論し、文明は文弱あるかと疑ひ、更に進んで學問と武健と相疎たざるべからざるを辯じ、大に武健の養成を謀らざるべからざるを述べ、之をあすの道は、武藝を修め、牀を鍛ひ、心を鍊るにあるを陳じ、擊劍柔道等の爲に、萬丈の光焰を吐いて壇を下れり。論脈井然、秩序よく整ふ、其武藝の不振を慨するに至りては、聴くものをして、覺えず奮興せしめぬ、然れども行辭稍平板に失し、語尾少しく明晰を缺ぎ、氣鋒銳利の所なく、唯層々論じ去り論じ來りて、大波小波洶湧横生する奇觀に乏しかりしは、頗る遺憾といふべし。次に中川會長の『長崎土產』あり、會長公務を帯びて長崎に遊び、前日實に歸熊せらるる也。途上矚目せられたる所を捕捉し來りて、之を會員に頒たんとす、其土產とは果して何ぞ。喝采の裡に會長は靄然たる和氣を帯びて壇上に立たれぬ。説起して曰く、『今此に述べんとする土產の外に、尙一の土產あり』と、是より嶋原城趾の懷舊談となり、稻荷社頭の櫨紅葉に對して、封建

時代の勸業談となり、外國の獎勵法に及び、長崎に入りて愈興味ある談話となりぬ。暴清膺懲の軍起りてより、皇國の人士皆奮起せざるを、而して、長崎の地は、實に軍艦の往復する處、其地素より注目すべきと多し、會長身其地を踏み、親玄く目覩して其感懷を吐露せざる、興味津津たる素より也。中に曰く、『曩に媾和使の來る、從ふもの四十名許、氣概あるもの殆んど之あるを、一人姓を吳といひ名を某といふものあり、怛怛として遂に上陸せず、其意を問へば慨然として曰く、吾國亦亡滅に近しと。噫支那國廣き彼の如く、而して氣節あるもの少き此の如し、初め戰爭の起る、支那國人の居留地に留りしもの纔に百五十餘、近來に至りては、歸來するもの頗々、既に三百五十に上り、旅順陷るも、威海衛備を失ふも、毫も意に介せざるが如し』と、支那の今日ある、寧ぞ怪むに足らんや。談話は一轉して軍艦吉野、秋津洲、浪速に移りぬ。其戰地に於ける偉勳を説き、其損傷の大小を述べ、さては其の構造より、速射砲となり、水雷艇となり、詳密周到、遺す所なし。殊に吉野が支那の水雷艇を追ひたる光

景を叙して、恰も兎狩の如くなりきといはれたるとき、拍手の擊暫くは止む所を知らざりき。是に於て、『尙一の土産』を紹介し、最後に及んで説きて曰く、『今や皇軍連戰連勝、外國の日本を見る、また前日と同じからず。是より先き外船の長崎を出入する、税關吏就きて之を檢すれば、中等の待遇を以て我に對え、出港證書の如きも、手續を終ゆれば直に出帆せしが、今や則ち然らず。税關吏に對するに上等の待遇を以てし、出港證書の如き、必ず之を問ふに至れり。且長崎は開港以來未曾有の勢を呈し、英、佛、獨、魯四強國の中將、來りて其地に在り、水兵の上陸亦頗る夥しと雖も、皆從前の如き驕傲の風なく、車夫に至るまで之れを喜ばざるを』と、更に進んで曰く、『余が諏訪神社の境内を逍遙するに方り、外國の水兵、余が前に立ち、敬禮を行ひて去れり、是れ未曾て耳にせざりし奇事、屬す、而して此の如きに至りしもの、是實に皇軍連勝の結果にあらずや』と。喝采聲裡に其談話を終へられぬ。次に從軍記者内海香洲君出づ。挈え來りし戰利品は擴げられぬ、帽あり、袴あり、表衣あり、飾玉あり。

り。其色灼然頗る奇とするに足る。渡邊君之を着て壇側に立つ、宛然たるチャンク坊、觀るものをして覺ゆる失笑せしめぬ。從軍談は始れり、硝煙蔽ひ、彈雨飛ぶ處、劍閃き銃轟く、壯觀目撃する如し。談話は榮城灣の上陸に始まり、劉公島の陷落に終る。時日を逐ひ、地圖を按じ、頗る精詳、知ること能はざるところを知り、聞くこと能はざる所を聞く、或は正當防禦の笑話となり、或は文明的戰爭の新定義とあり、聽くもの皆壯絶快絶を叫ばざるなく、言ふべからざる快味と、言ふべからざる教訓とを得ぬ。今一々之を記せんと欲すと雖も、此に筆すること能はざるものあり、愛を割きて之を略す。曩には菊池、松澤、高木三君あり、特に吾會の爲に其從軍の景況を語り、今亦内海君の從軍談を聞く。吾儕學窓にあり、辛楚を軍旅の間に嘗むること能はずと雖も、屢此種の談話を聽くことを得、豈亦快からずや。談話終りて質問例によりて起り、一々明晰ある答辯を得て、大に益するところありき、午後六時會を閉づ。櫻井副會長特に内海君を饗して、其勞を謝せられたる。當日尙他に演説すべき人あり。

と、殊に櫻井教授の有益ある講話あるべき筈なりしも、時間足らずして、之を聴くと能はざりしは、遺憾とする所あり。

擊劍部近況

響きに龍南會委員總辭任の事あるや、我擊劍部は、尤熱心にして、尤適任ある前委員下山、岩井の二氏を失ふに至れり。我部の不幸、實に大なりと云ふべし、然れども、弦を離れたる矢翦は、到底中途にえて止る者に非ず、我部の進運は、今や弦を離れたる矢翦の如き、豈に漫に停止する者ならんや。我部員の全數、既に百八拾餘名の多きに達せる者は、決して怯むに足らざるなり。部員此の如きの多きに達す、師範の増聘、器械の増加は、欠ぐべからざる要件あり。是を以て、前委員は、和田師範(月水金出勤)の外に、更に野田師範(毎日出勤)を聘して、師範の不足は、之を補ふを得たり。龍田山嶺、松濤颯々の聲と、擊劍道場、竹刀憂々の音と相和するの裡、幾十の健兒が、知らず識らず、其元氣と其軀軀とを養ひつゝあるを知らば、聊か人意を強ふする所あらん。而えて、器具は、此節更に今年度の當部費用中より、甲號

二個、乙號十個を新調し、學校より、甲號十個、乙號三十個を新調して、授與せらるゝ筈にて、共に今月内には出來すべき豫定なれば、現在の器具の上、更に甲號十二個、乙號四十個加はるべければ、來學期よりは、以て部員諸君の充分ある使用に供するを得ん、部員諸君幸に健在あれや。

我部員は、既に百八十名余の多きに達せりと雖、器具不足等の爲めに因るか、或は又他に因由する所あるか、平常の出席者は六十名内外にして、甚盛なりとは云ふべからず。され共、一昨年より昨年は盛んに、昨年より今年は盛んにあり、又前々月より前月、前月よりは今月盛況を呈する有様にて、年に月に、盛運に向ふの狀勢なれば、來學期に於ては、七十名或は八十名内外の出席者を得べき事は、今日より豫測するを得る所あり。今日の出席者六十名内外の人々は皆共々熱心精勵の人のみあれ共其中特に精勵人を驚かしむるは、實に左の諸氏なりとす。

飯田御世吉郎、熊手左右吾、賀來佐賀太郎、河村眞儀、鶴田英造、松原常興、上村武尚、關嘉八郎、新宮盛太郎、守田猪一郎、近藤精一、守住一男、吉見富治、柴田文平、植田精作、大野數衛、樋口久人

擊劍部にして、熱心精勵、右の諸氏の如きを得たるは、實に當部の幸あり。故に吾人は當部の景況を報ずるに當りて、右諸氏の姓名を特筆せざるを得ず。

(委員投)

柔道部報告

柔道部の近況は、前號周英生の投書既に之を悉せり、今復喋々を要せず。然れども、來學期よりは、柔道も愈体操副科として施行せらるゝ由あれば、隨て修業者の數増加するに至らんと必然あり。されば、今柔道部の經歷を叙する、豈不急ありとせんや。指を屈すれば既に五年の以前、嘉納前校長本校に就任せらるゝや、多少柔道を修めたるもの十數名を今までの擊劍道具置場に集めて、柔道の指南を始められぬ。龍南會の組織成るに及び、柔道部の名稱を以て、今の瑞邦館裡に疊二十枚を敷き、道場を此に移せり。爾來部員漸く多く、五十と増し、百と加はり、二百となり、二百五十となり、之と伴ひて、疊は五十枚となり、百枚となりぬ。斯の如く長足の進歩をさせるもの、嘉納前校長の熱心と盡力とに由るといはざるべからず。先生は獨柔道の術を教へたるのみあら

ず、又柔道の趣旨を誤らしめざるとに勉められき。先生曰く『柔道を以て遊戲視することなかれ、軀軀を壯健よするといふよりも、寧ろ精神を練るといふことに重きを置き、柔道の理を以て、之を處世上修身上に應用せよ』と。柔道部員は斯の如くにして教鍊せられ、柔道部は此の如くにして隆盛に赴けり。一言以て之を蔽へば、吾校の柔道は、理論と實際との並行を以て其根を植ゑ付けられぬ。其幹を長し、其枝を伸し、其花を開き、其果を結ぶ、亦實に此主義に出でざるべからず。部員諸君、益奮うて好果を結ばんことを期せよ。

戶外遊戲部小會

惠風吹き度りて、柳眼漸く新に、春色雍々として、梅芳正に薫り、蘇嶽の殘雪頗る融け、龍山の靄色愈濃あらんとす、正に是れ春眠曉を覺えず、情性稍動かんとする時なり、運動場裡、ボール舞ひ、バット閃くの壯觀を觀ざると久え。三月十日、戶外遊戲部の小集會を開く。思ふに鬱積せる英氣の一時に發するを觀るを得ん。乃ち往て觀る。初めロンドンテニスを試むるもれありしが、頓てべ

「スポーツ」は、豫定の如く、午前十時半を以て始まり。正午に至るまで、數番のイニングスありしも、特に記すべきとあらず。遠慮なく言は、恰も當日の天氣の如く、沈鬱に始まり、沈鬱に終りぬ。由來「スポーツ」の技たる、敏活を以て之を行らざるべからず、而して此觀ありしもの、是抑も何の故ぞ。午後に至りては、稍生氣を現せり、委員の奮發は素より宜しく然るべき所、場に在りしもの稍其色揚れる如くありき。第一回に於ては、紅組一點を贏ち、白組〇と稱す、爾後互に勝敗あり、第四回に至りては、白は僅に一點を得、紅は既に七點を占めたり。紅組の士稍驕れる色あり。是に於て、大勢正に一轉し、第五回に至りては、白のホーム又歸るもの、續々として大河の決する如く、遂に勝は全く白組の健兒に宿りぬ。後又數番の遊戲ありしも、今盡く之を記せず。個人の働作に就きては、一々之を指摘するの筆を、奈何せん、あらず、之を指摘する要なきを、奈何せん。

朝來の曇天は、委員をして憂色あらまめたりしが、幸にして遂に一滴の微雨を降さず、午後に至

りては、雲は全く碧落の際に収まり、爛々たる春風面を拂ひて、誠に愉快を覺えぬ。寄語す戶外遊戲部の諸君、益奮發して竭す所あれ。ボールを抛げ、バットを振ふ、豈戶外遊戲の目的あらんや。此日の集會眞に惰眠を攪破するに足りしや否や、抑も亦諸君が鬱積せる英氣を洩すに足りしや否や。母校の戶外遊戲をして、盛ならしむるも、衰へしむるも、一に諸君の發奮と否とに由るあり。冀くは、四月の大會、諸君が一層の熱心によりて、龍驤虎鬬の壯景を觀るを得ん。

弓術部小競射會

委員語るらく、近來的の貼替頗繁く、殆忙殺せられんとすと、射るもの多きか、はた其技の熟達せるか、何れにせよ、弓術部の爲に祝すべき也。唯憾む、毎週金曜の定會、多くは雨天よして、幾多の熱心家をして失望せしむることを。三月三日、小競射會を行ふ、第一に賞品爭あり、賞品には籤を附し、籤の數都て百本あり、尺二に中りしものは一本を獲、八寸に中りしものは二本、其星に中りしものは三本、六寸に中りしものは三本、其星よ中りしものは四本、三寸に中りしものは五本

す。分つ所一葉と雖も、帝國の安危は實に此小片の内に見るべし。トラハルガルの如く、チートルローの如く、關が原の如し、況んや世界有數の義戰あるをや。謹んで兄等に頒つ、夫之を了せよ。

佐世保に於て

紀元二千五百五十五年三月 松澤 敬讓

是實に實戰の活畫あり。浪を蹴り、雲を裂き、森茫たる黃海の上、吾十有餘隻の艨艟、敵艦と奮闘激戰せし壯景、収めて一幅の裏に在り。觀來りて氣昂り肉飛ばんと欲す。亦匾額となして之を掲げ、永く紀念に供し、謹で其厚意を謝す。

故清水君紀念文庫の寄贈

故清水定喜君、大志を懷いて病に斃る。痛恨何ぞ堪へん。頃者知友諸氏相謀り、金を醵して書籍を購求し、同君の紀念とて之を雜誌部文庫に寄贈したり。君が靈にして知るあらば、九泉の下、當に知友諸氏の親情を感謝すべきなり。

體操科の教練

日清の戰爭起りてより、體操教師概ね軍に従ふ。わが校も亦沼田、三池、安東三氏の去るに逢ひ、

此に體操科の一頓挫を來しぬ。同人是が爲に脾肉の歎あること久し。頃日三年生をえて教練を掌らしむるとぞあま、既に着々其歩を進む、然れども、三年生諸氏素より未だ甚老熟の人のみにあらず、訓練の際、或は隔靴搔痒の憾なしとせず。倘し一同相共に協和して怠らずんば、庶幾くは、此憾なきを得るに至らんか。果して然らば、野外に營し、山路を分け、壯絶ある演習をあたすを得る。亦難しとあらず。寄語す三年生諸氏、其任を重じて愈奮勵する所あま。

春期休暇

春期休暇は來りぬ。花舞ひ、鳥歌ひ、烟景人を招き、紅綠野に滿つ。如何にして此日を消遣せん。思ふに、或は輕衫颯然、去て自然の靈泉に宿痾を洗ふ人もあらむ、或は驛路迢々、春風を趁ひて故園の花を賞する人もあらむ、或は布韃芒鞋、健脚を擧げて山川を蹶渉する人もあらむ、或は一片の斷碑に英雄の幻影をしのび、或は茫たる古戰場に懷舊の涙を揮ひ、或は雍々たる家庭の和樂に浴し、或は霏々たる鄉黨の懇話に接せむ。其際必ずや詩情の油然として湧くあらむ、吟魂の勃

を取る規定なり、尺二に二回、其他は三回の立を畢へて賞品を頒つ。籤の多きもの必ずしも賞品多からず、善く射たるもの必ずしも善き賞品を獲ず、其争や誠に君子。三寸に命中せるものを賀來君一人とす、得意想ふべく、お手並敬服すべし。此日寺井君より見事なる矢一對寄贈せられたりしが、的中の數多うりしたため、遂に檜林君の手に落ちぬ、いつもながら、お手際といふべし。終りて源平競射あり、鳴弦の音、當り星の聲と和し、中りて喜ぶもの、外れて舌打するもの、皆思を凝して相競ひ、五時に及んで弦を収めぬ。要するに、此日命中せるもの甚多し、亦以て其素養を觀るべく、其熟達を知るに足る。

『尙一乃土產』

中板寫眞都て十六葉、日清戰鬪の光景を寫せるもの、是を中川會長の『尙一の土產』とす。會長の長崎に遊ぶ、軍艦秋津洲を訪ふ。大軍醫牧虎文氏此寫眞を贈る、氏醫學部の卒業證書授與式に臨み、又其ボートレース會に來る、頗る學生を愛すといふ。此寫眞は其義弟某氏の描ける所を寫せるもの、平壤の戰鬪あり、松崎大尉の戰死あ

り、殆ど實況を觀るが如し。氏今特に之を吾校に寄す、厚意謝せざるべけんや。今之を匾額に納れて雜誌部文庫に掲げ、朝夕之に對して忠勇の志氣を鼓舞す、牧氏の賜亦大なりといふべし。

黃海戰爭の寫眞

海軍少機關士松澤敬讓氏、嘗て吾校に來りて從軍の壯話を談じつ、語尙耳に在り。氏今佐世保に在り、頃者特に黃海戰爭の寫眞を贈る。裏面に文あり、曰く。

一夢既に醒む、其跡茫乎たり。一戰既に過ぐ、再思得べからず。明治二十七年菊月十七日、伊東海軍中將の帥ふる帝國の艦隊は、丁提督か帥ふる彼の北洋の艦隊と相馳驅すると、午より西に至る。余や當時嚴嶋に在り。戰の初め、十七瓏の彈片にて僅に傷を負ふ。爾來既に半歲、傷や治して累せず、世界有數の血戰亦茫乎捕ふべからず。乃砲煙彈雨の間、在吉野號ある三輪海軍少尉が撮寫せるもの五葉を得て、永く紀念となさんとす。嘗て傷をいどふて熊本に遊ぶの日、此堂に於て兄等と相語る。語意を盡さず、意亦透徹せず。一葉を採て兄等に呈

然として躍るあらむ。諸兄幸よ錦篇綉章、以て奚囊を充たし來りて、次號の誌上に煥然たる光彩を添へよ。

近事片々

○昇叙 中川學校長は從五位に、賀來、笠間兩教授は從七位に、いづれも昇叙せられたり。

○任命 雇山崎兎茂吉氏は助教授に任せられ、村上萬太郎氏は博物科助手を命ぜられ、村井嘉一氏は教務掛圖書掛を命ぜらる。

○出張 中川學校長は三月二日、醫學部卒業式に臨席の爲め、長崎に出張せられたり

○負傷兵士慰問 本校職員は、物品を寄せて負傷兵士の病苦を慰藉せられ、總務委員西川古川兩氏は、生徒を代表して、豫備病院に慰問せり。

○生徒移動 一部一年佐藤俊彦氏は退學、一部一年阿部德太郎氏は休學、舊豫科三級宮村眞鶴氏(濟々竈へ)、全鎌田虎彦氏(造士館へ)は轉學、

以上はいづれも許可せられたり。

○本校一覽 印刷成る。紙質良好、印刷頗鮮明、終尾に龍南會の規則を附す。

○第二學期試業 二十五日を以て始まり、二十八日を以て終る。苦悶に堪へずといへども、愉快ある春期休暇は、將に笑て吾儕を迎へんとす。

雜誌部文庫に寄贈の書籍雜誌

雜誌部文庫設立以來、續々書籍雜誌の寄贈を辱うし、文庫の基礎漸く鞏固あるを得たり。茲に寄送者諸氏の厚意を深謝す。寄送書目は、漸次之を本紙上に披露すべし。

寄贈雜誌

校友會雜誌、尙志會雜誌、學友會雜誌、青年文、錦溪、學術講談會雜誌、碩田交友會雜誌、矯々社雜誌、九州評論、同窓學友會雜誌、研瑤會雜誌、崇廣會雜誌、福岡全窓會報告書、國民新聞、九州日日新聞、

寄贈書目

書名	冊數	寄贈者	書名	冊數	寄贈者
七書理謬抄	十	内田教授	觀光紀游	三	内田教授
			文談集	一	内田教授

書名	冊數	寄贈者	書名	冊數	寄贈者	書名	冊數	寄贈者
今世名家文鈔	一	內田教授	平文和英辭書	一	佐久間教授	鴉片戰史	一	全
翻譯文例	一	全	三省錄	五	全	トラファルガー戰史	一	全
貨幣問題	一	有馬教授	魏叔子文鈔	三	湯原講師	ナポレオン戰史	一	全
最新學派經濟學	一	全	鮮血遺書	一	全	教育の大本	一	全
Protection of Free Trade,	一	全	立正安國論	一	全	讀書法	一	全
披雲遊記	一	高橋貫藏	史道諺文考	一	全	益軒十訓	一	全
淺瀬の波	二	杉山富樫	Kant's Critique of Pure Reason.	一	全	世界三聖論	一	全
水産學大意	一	後藤周藏	近思錄示蒙句解	一	隈部講師	周遊雜記	一	賀來教授
瓊克拉的	一	飯田御世吉郎	經名考	四	內田教授	W. E. Gladstone	一	全
高嶺君遺稿	一	大幸教授	王陽明詩鈔	一	全	Einnehmer Prüfungsapparat	一	篠本講師
佛教或問	一	全	哲學通鑑	二	全	Mhena Liemund Mineralpreparate	一	全
Golden. Deed.	一	全	はゞりなら	一	全	Paleontologienund Augenlinie Geologie	一	全
The Haunted House,sc.	一	全	Nervous Diseases.	一	杉山富樫	Gesteineund Dungschritte	一	全
Four Manicolds	一	全	Two Tales	一	全	教育と遺傳	一	全
標註士佐日記講義	一	佐久間教授	訓蒙日本外史	七	佐久間教授	Sir Roger Da Cavalry	一	本田 弘
土佐日記	一	全	唐詩選講義	一	全	個人對國家	一	佐久間教授
日本古今名家圖解	一	全	十八史畧講義	二	全	狂言評註	一	高木敏雄
Zeldens's Commercial Geography.	一	福井教授	字音かなづいひ	一	全	歸省	一	後藤一雄
History of Henry Esmond.	一	佐久間教授	大日本新地圖	一	全			
Colin's Globe Dictionary.	一	全	靖獻遺言	三	三橋 保			
哲學字彙	一	全	應用漢文學	一	全			
標註職原抄校本	六	全	真山の翠	一	村井啓太郎			
			臺灣志	一	故清水君知友			